

18	豊田	足助中学校	マツヤマ ナナコ 氏名 松山 菜々子
分科会番号	2	分科会名	外国語教育

自己表現の幅を広げ、英語でのやり取りを楽しむ生徒の育成
—毎時間の帯活動を通して—

豊田市立足助中学校
松山菜々子

1 主題設定の理由

本研究を始めるにあたり、本学級で英語の学習についてアンケートを実施したところ、約60%の生徒が英語を「苦手」と感じていることが明らかになった。特に「書くこと」「会話」「文法」の学習を苦手な項目として挙げる生徒が多かった【資料1】。一方で、英語の学習の中で「楽しい」「興味がある」と感じられるものについてのアンケートに対しては「聞くこと」や「会話」と回答する生徒が多かった【資料2】。このことから、生徒は英語でやり取りを行うことに対して苦手意識がありながらも、興味を示していることが分かった。さらに、「会話」の中で何に困難を感じているのかを尋ねると、「単語の発音が分からない」「言いたい単語や表現が英語で出てこない」「文法を正しく使っているのかが不安だ」という声が挙がった。これらの回答から、生徒は英語でやり取りをしたいという思いをもっている一方で、英語での自己表現の知識・技能が定着していない現状から、英語でのやり取りに対して苦手意識を感じているということが明らかとなった。

中学校学習指導要領（外国語）では、「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」や「目的・場面・状況に応じて、自分の考えや気持ちを表現し、伝え合う力の育成」の必要性が示されている。生徒が英語でのコミュニケーションに積極的に取り組むためには、単に語彙や文法を知識として身に付けるだけでなく、「自分の思いを伝えられた」「自分の英語が通じた」という成功体験を積み重ねることが重要である。そこで、本研究では実際の生活場面を想定し、目的・場面・状況に応じて表現する活動を帯学習として設定し、生徒が英語でやり取りをする体験を積み重ねることで、自己表現の幅を広げ、英語でのやり取りを楽しむ生徒を育てたいと考え、主題を設定した。



【資料1】特に苦手な活動についての調査



【資料2】興味のある活動についての調査

2 めざす生徒像

自己表現の幅を広げ、英語でのやり取りを楽しむ生徒

3 研究の仮説と手だて

【仮説1】教科書や既習表現を用いた例文を何度も音読すれば、文法や表現が定着し、自己表現の幅を広げられるだろう。

＜手だて①＞ スキットの音読による自己表現のインプット

教科書内の文法や表現を用いたスキットや例文を帯学習で音読することで、英語表現の知識や英語でのやり取りの流れを習得し、自己表現の幅を広げる。

＜手だて②＞ フォニックス学習による、発音パターンのインプット

教科書で用いられる単語の発音を理解し、会話の場面でも自信をもって発音するために、帯学習でフォニックス学習を行い、文字と音の関連性や、発音の規則を学ぶ。

【仮説2】実生活でよく用いられる話題でやり取りを行う場面を設定することで、今までに身に付けた文法を用いて自己表現をし、自由なやり取りを楽しむことができるだろう。

＜手だて③＞ Q & Aの例文を用いたアウトプット

Q & Aでのやり取りを行う場面を設定し、手だて①の音読活動で身に付けた文法を用いて自己表現をする。

＜手だて④＞ Small Talk によるアウトプット

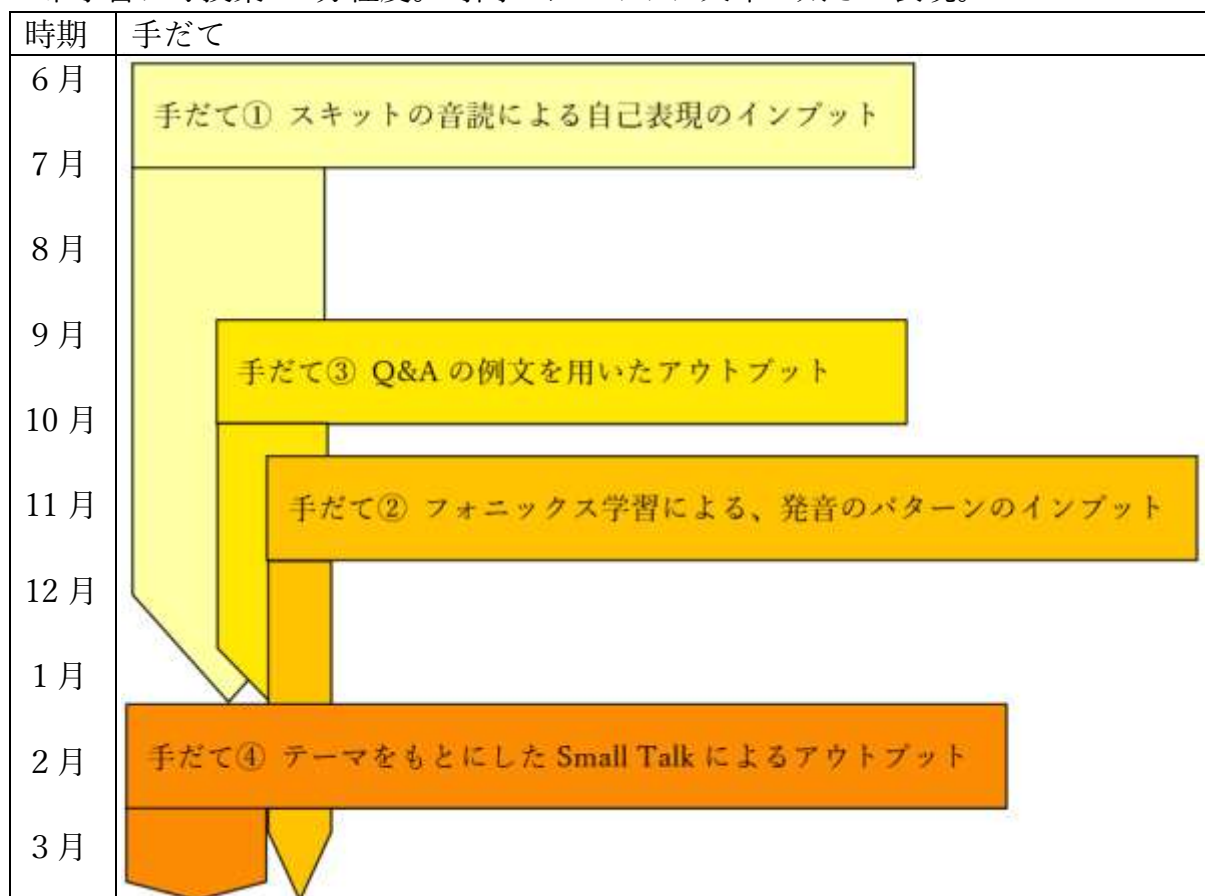
実生活でよく用いられる話題をテーマとした Small Talk を帯学習で行い、他学級の生徒と交流する機会を通して、普段英語で話す機会のない相手とでも英語で自由なやり取りを楽しむことができるようになる。

4 抽出生徒について

抽出	現在の様子	目指す姿
A	やり取りや音読の活動に積極的である。しかし、やり取りの活動の中では、言いたいことがたくさんあるのに対して、英語を用いて自分の思いを正しく相手に伝えることができず、やり取りを心から楽しめていない様子が見られる。	基本的な文法や表現の知識を定着し、自己表現に応用することでより正確に自分の思いを相手に伝えられるようになってほしい。
B	筆記テストの点数は高く、基本的な文法や表現は身に付いている。しかし、やり取りの場面では自分の持つ知識を自己表現に繋げて会話を広げようとする姿が見られない。	文脈のあるやり取りをすることで相手に興味をもち、自己表現をすることで会話を広げ、やり取りを通して相手について深く知ることを楽しめるようになってほしい。

5 実践の計画

帯学習は毎授業 15 分程度。時間のウェイトは矢印の太さで表現。



6 研究の実際と方法

(1) スキットの音読により、自己表現のやり方や流れをインプットする(手だて①)

教科書の文法や表現を用いたスキットを音読し、自己表現の定着を図った【資料3】。また、英語を苦手とする生徒でも自己表現のやり方や流れを定着させられるように、希望する生徒にはカタカナで読み方を記したプリントや、日本語訳が記されたプリントを配付した。生徒Aは、初めのうちはカタカナ付きのプリントを見ながら音読をしていたが、音読活動を始めてから3回目の授業では単語の読み方を理解し、カタカナ無しのプリントに切り替えて音読をすることができていた。さらに回数を重ねていくうちに、生徒Aはスキットをほとんど見ずに、相手の表情をみたり身振り手振りをしたりしながら活動をするようになった。完全にスキットと同じ言葉ではないこともあ

Let's Talk! Part2: パーティーをしよう	
Kana	English
① Hi, Emma	① Hi, Kana. How are you?
② I'm great!	② Oh, you look so happy.
③ Ms. Natsumi, and I are going to have a <u>lovesta party at my house tomorrow</u>	③ That's nice! Have a great time.
④ Thanks. I know that you are good at <u>making sweets</u> . Can you join the party?	④ Of course, yes! I want to enjoy eating sweets with you all.
⑤ Thank you! Ms. and Natsumi will bring <u>some cookies and chocolates</u> .	⑤ Then, I will bring some cupcakes. Are there any house rules?
⑥ Yes. We must <u>wash our hands when we go back to my house</u> .	⑥ OK. Do I have to say "tadama"?
⑦ Of course. Also, we have to <u>wash dishes ourselves</u> .	⑦ Really? I don't have to wash dishes in my house because my mother washes them.
⑧ Oh... You should help your mother.	⑧ Yes... I will try to help her next time.
⑨ Anyway, I'm looking forward to meeting you <u>tomorrow</u> .	⑨ Me, too! Bye!

【資料3】実際に用いたスキット

ったが、相手との話が通るように考えて話すことができていた。以上のことから、生徒 A はスキットの音読活動を通して自己表現のやり方や流れをインプットすることができたと考えられる。よって、手だて①は有効であったと考える。

(2) フォニックス学習によって、発音パターンをインプットする (手だて②)

初めに、生徒に対して共通のフォニックスをもつ英単語を 5 つずつ記した原稿を提示し、音読をさせた。その際、読めないものがあったとしても飛ばさずに自力で読んでみるように指示をした。結果、発音クイズの平均正答率は 46.2% であった。なじみのある単語については、正しく発音できる生徒がほとんどだったが、同じ発音規則をもった新出の単語は自力で読むことができない生徒が多かった。生徒 A も look と book の横に並んだ hook を「ホーク」と読んでおり、発音に規則があるということに気付けずにいることが分かった。その後の授業からフォニックスの要点がまとめられた短い動画を用いてフォニックス学習を始めた。生徒 A はフォニックス学習に特に積極的に参加し、フォニックス学習を何度も繰り返し行う中で、教科書内で教師から自力で読めそうな単語を指定すると、【資料 4】の「さっき、フォニックスで出てきたやつ!」というような発言があり、発音のルールに気付く様子が見られた。以上のことから、手だて②は有効であったと考える。

(サイレント e の学習後)

教師: 今日の New Words 1 回自分で読んでごらん。3 つ目と 9 つ目とかできそうじゃない? (site と decide)

生徒 A: さっき、フォニックスで出てきたやつ!
3 つ目はサイトじゃない?

教師: A さんいいね。9 つ目いけそう?

生徒 A: んー、デサイド?

教師: サイレント e 使って読めているね。

【資料 4】フォニックス学習の授業記録

(3) Q & A の例文を用いてアウトプットする (手だて③)

スキットの中で特に身に付けさせたい文法や表現が含まれる文にマーカーを引かせ、マーカーを引いた文の動詞や名詞を変え、自己表現をするように促した。生徒 A は、文中の名詞を変えることはできていたが、使いたい言葉を英語で表現できずに日本語を使っていたり、動詞をどのように変化させたらよいのか分からずに話が止まってしまうことがあった。そこで、動詞や名詞を適切に変えて自己表現を行うことができていた生徒に、全体の前で発表させたり、伝えたい内容がうまく英語で言えなかった生徒の表現方法を教師から伝えたり、生徒の中で共有したりする時間を設定した。生徒 A は、この時間に積極的に挙手し、本人が日本語を使った箇所を全体に共有した。また、【資料 5】の、「H さんの変えるやつまねしたい」という言葉から、生徒 A は他の生徒が発表した表現も積極的に自分の活動に取り入れることができており、スキットの音読と表現活動を通して他の生徒の自己表現に興味をもち、実際に使ってみようという気持ちを高めることができた。

今日は名前とスポーツだけを変えてあまりつかえずに読めたし、本文の音読もめっちゃたまにつかえるだけで、ちゃんと正確(?)に出来ました。もっと変えられるところは変えていって、オリジナルで音読(実際に会話してるように)できるようにしたいです。あと、H さんの変えるやつまねしたい!

【資料 5】生徒 A の振り返り

スキットを用いた活動の際、生徒 B の振り返りの中で「台本を見てしまって、ペアとアイコンタクトをして話すのが難しい」という言葉があった。そこで、生徒に対して、台本がない状態でペアと交互に質問しあう Q & A のやり取りを 1 分間続けるように指示をした。生徒 B は、相手からの質問に正確に英語を用いて答えることができていた。しかし、生徒 B は相手の答えに対するリアクションを返すことがほとんどなく、

次に相手に問う質問も、全く文脈の無いものだった。このような状態は、「やり取り」とは呼べないと考え、文脈のあるQ & Aの練習をするために、“What did you eat for breakfast?”を話題としたQ & Aのスキットを配付した。生徒は何度かスキットを用いて、音読と表現活動を行った。スキットを用いた活動を5回の授業で行った後、台本なしでのQ & Aのやり取りを再開した。その際、教師から生徒に対して最初の質問を提示し、その質問に関係する話題で1分間Q & Aのやり取りを行うように指示をした。生徒Bは、スキットで登場した “What else?”を用いて会話を広げたり、特に趣味の合う友人とペアになったときには疑問詞を用いて具体的な話をしたりすることができるようになった【資料6】。以上のように、生徒Bは今までの活動の中で身に付けた文法をペアでのやり取りの中で用いて、自己表現をすることができていた。このことから、手だて③は有効であったと考える。

生徒B: I went to school and I practiced *kyudo*.
What did you do last weekend?
ペア: I played video game.
生徒B: Nice. Is that all?
ペア: No.
生徒B: What else?
ペア: I practiced basketball.

(4) Small Talk でアウトプットする (手だて④)

教師から提示された、実生活でよく用いられる話題で1分間ペアでやり取りを行うSmall Talkを帯学習として行い、話を盛り上げるために一方が質問を続けてもよいと生徒に伝えた。これまでのスキットを使った音読と表現活動を行う際に、「英語で楽しく会話することができましたか？」という質問に対して生徒Bは、ほとんど毎回5点満点中の5点を選択していた。しかし、台本もターン制もないSmall Talkを始めてからしばらくは、3点を選択していた。振り返りには、「何を話していいか分からなくて、沈黙が続いてしまった。」と書くことが多く、やり取りが止まってしまうことを悩んでいることが分かった。他の生徒のやり取りを観察していても、「何話したらいい?」「どう繋げる?」と困っている様子が見られた。そこで、1分間やり取りを止めることなく続けられたペアに、追加でどんな質問をしたか、どんな流れでやり取りをしたかを発表させた。また、やり取りが止まってしまったペアにはどんなことで困ったかを全体で共有させ、教師や他ペアから助言をする時間を設定した。生徒Bは、この共有の時間に挙手をするのはあまりなかったが、他のペアが使っていた追質問を次の時間に使ってみたいと振り返ることが多く、【資料7】の「相手がDid you cry?とっていて使えるなと思いました。」という言葉から他の生徒が使う表現に興味をもち、実際に使ってみようとする姿が見られた。

卒業式の話の時に、感動したかどうかをどう言うか分からなかったけど、相手がDid you cry?とっていて使えるなと思いました。

【資料7】生徒Bの振り返り

より多くの相手とやり取りを楽しむために、2学級合同のSmall Talk大会の場を設定した。Small Talk大会では、“What did you eat for breakfast?”や、“What are you going to do this weekend?”といった実際の生活場面を想定した話題を取り扱い、ペアが他クラスの生徒になるように座席を指定した。また、より多くの相手とやりとりできるように、片方の列をローテーションした。生徒BはSmall Talk大会の振り返りで、「英語で楽しく会話することができましたか？」という質問では満点である5点

を選択し、「いつもとは違う受け答えが聞けて楽しかった。」と振り返った【資料 8】。振り返りから、生徒 B は Small Talk の中で既習の表現を生かしてやり取りをし、やり取りの中で相手について知ることを楽しむことができた。このことから、手だて④は有効であったと考える。

普段やるときは、同じような話になっていましたが、今日はいつもとは違う受け答えが聞けて楽しかったです。いつもは使わない英語を相手が使っていて勉強になりました。

【資料 8】 Small Talk 大会での
生徒 B の振り返り

7 成果と今後の課題

(1) 研究の成果

<仮説 1 について>

既習の表現を使ったスキットを用い、音読活動とスキット中の動詞や名詞を変化させてやり取りをする活動を行った。これによって生徒 A は知識を定着させ、応用することで自分の思いをより正確に相手に伝えることができた。(手だて①の成果)

発音の学習では、規則的に発音できるフォニックスを継続的に学習した。生徒 A は発音の規則に興味をもち、新出単語であっても自ら発音してみようという意欲が向上した。(手だて②の成果)

以上のことから、生徒 A はスキットを用いた活動の中で知識を定着させ、自己表現の幅を広げることができ、フォニックス学習を通して初めて出会う単語も自分のものとして使う準備ができるようになったと考えられるため、仮説 1 は妥当であったと言える。

<仮説 2 について>

スキットを用いながら Q & A のやり取りを生徒にさせた。生徒 B は、スキット中で使われていた表現や疑問詞を使った疑問文で具体的に話を展開させることができた。

また、学級での Small Talk を継続的に行った。また、普段英語で会話をするのではない生徒とでも円滑にやり取りができるように 2 学級合同での Small Talk 大会を実施した。生徒 B は、普段とは違うやり取りの流れによって相手の新たな一面を知ることができることができた。

以上のことから、実生活でよく用いられる話題でやり取りを行う場面を設定することで、今までに身に付けた文法を用いて自己表現をし、自由なやり取りを楽しむことができたと考えられるため、仮説 2 は妥当であったと言える。

(2) 今後の課題

手だて①③④では、生徒の困りごとを全体で共有し解決策を教師から伝えることで、生徒は自分の自己表現をより豊かにすることができた。しかし、これを生徒の中で解決させることで、生徒の知識・技能を向上させることができると考える。今後も Small Talk の活動を続けていく中で、生徒の中で解決できそうなものについては生徒に投げかけるようにしたい。

手だて②ではフォニックス学習を行ったが、手だて②を始めた時期が遅すぎるように感じられた。フォニックス学習は定着までに繰り返しの学習が必要である。今後、授業の構想を練る際には、より早い段階でフォニックス学習を取り入れ、やり取りや音読活動の中でより早くして英語のやり取りをより多く楽しめるようにしていきたい。